

日本語教育実践研究（7）

－漢字教育実践研究－

担当教員 鈴木 義昭

そもそも、日本語教育における漢字教育は、単なる書写技術教育（読み方・書き方）、識字教育（文字の覚え方、漢字の形、意味の弁別）に止まらぬ、音声教育、語彙教育、文章表現教育、読解教育をも含めた、より多面的な範囲を含んでいる。したがって、漢字の「書き取り」練習だけで済むものでもないし、知識の切り売り、例えば、漢字の「六書」を得得と講じるだけのものではあってはならない。それゆえ、漢字教育の課題は、文章の中や会話の中に出現する漢字語彙を如何にして効率的に理解させていくかという点に重点が置かれるべきであろう。ただ、初級・中級・上級に漢字の提示順があるように、それぞれに応じた教育法があってしかるべきである。また、古くて新しい課題、漢字系学生、非漢字系学生に対して如何に教えるかという課題も無視できないし、日本語非母語話者の漢字教育に見られる問題も等閑視できない。

こういう課題を蔵しながらも、2005 年春学期の漢字教育実践研究は、以下のメンバーで臨んだ。受講実習生は、張芑蕾、陳娟、楊魁魁、陸麗青の四名で、対象クラスは、日本語研究教育センター設置講義、「漢字指導7・8A」である。本学期は受講実習生四人全てが日本語非母語話者であった。本時は、総勢四名ということもあり、一人当たり二回の教壇実習（授業後半の30分）を行うことができた。詳細は後稿、各人の報告によることとして、以下、その名称のみを挙げておく（本学教育学部聴講生、初美絵里花が聴講と実習を行ったので、併せてこれも記しておく）。

張芑蕾：「送り仮名」・「熟語の読み方」

陳 娟：「日本語の促音」・「形声文字」

楊魁魁：「連濁」・「百面相の漢字の読み方」

陸麗青：「同音異義語」・「四字熟語」

（初見絵里花：「助数詞、接頭語接尾語になる漢字」教育学部聴講生）

現在、非漢字系を主とする国々で、漢字、漢字教育が一種のブームとなっている。一方、漢字系学習者の多い中国でも、日本語の漢字教育の見直しの機運が生じているやに聞いている。日本語母語話者が改めて、漢字教育に目を向け、新たな方法を開拓する手がかりを得るためにも、本時のような授業を多数受講されることを望んで止まない。

（スズキ ヨシカズ・日本語教育研究科教授）